3. 競技適応の心理

——国際大会に参加した女子柔道選手のYGデータから——

大阪教育大学　船越　正康　東北大学大学院研究生　島谷　順子
横浜国立大学　木村　昌彦　広島大学　出口　達也
講道館　向井　幹博　武蔵大学　山口　香
叔徳文化専門学校　鈴木　若葉　大阪教育大学大学院　河野　和憲

3. The Psychology of Adaptation to Competitive Sports: Research from psychometric data of Japanese women's Judo players participated in international games.

Masayasu Funakoshi (Osaka Kyoiku University)
Yoriko Shimaya (Tohoku University Graduate Researcher)
Masahiko Kimura (Yokohama kokuritu University)
Tatsuya Deguchi (Hiroshima University)
Mikihiro Mukai (Kodokan Judo Institute)
Kaori Ymaguchi (Musashi University)
Wakaba Suzuki (Shukutoku Vocational College)
Kazunori Kawano (Osaka Kyoiku University Graduate student)

Abstract

The YG psychometric method was performed about one month after the 15th Fukuoka International Women's Judo Championships. The subjects were divided into two groups of eight: a high performance group (generally medalists) and a low performance group (generally non-medalists). Non-parametric statistics were used to analyze the data. Results, which were consistent with previous research, identified the following psychological characteristics:

1. Players in the high performance group were emotionally stable and socially extroverted.

2. Players in the low performance group showed increased measures of depression, inferiority, and nervousness, and lowered general activity.

3. Players in the low performance group, however, compensated for their emotional instability by increased thinking introversion and acting rhathymia.

Results suggest that these characteristics could transcend differences in sex and competition levels, however.

Ⅰ　はじめに

競技における精神的問題の解決に心理テストを用いる試みは、東京オリンピックに前後して工夫されるようになった。その最初は、広く産業界で職業適性の弁別や事故頻発者の予測を中心に、作業素質検査として出発した内田クレペリン精神検査（UK法：内田，1957，戸川，1973）のスポーツ利用（小林，1970，1974）であり、精神的側面から見たスポーツ適性研究（小林，1986，高橋，1988)、コーチング利用（船越，1993)、コンディショニング（船越，1993）などの分野で成果を上げてきた。次いで質問紙法（続，1975）が登場し、臨床心理で活用されるMMPI（斎，1967)、モーズレイ性格検査（MPI：古賀，1968)、健常者を対象とした矢田部ギルフォード性格検査（YG：辻岡，1976)、競技意欲をはかるTSMI（文部省，1986)、心理的競技能力を見分けるDIPCA（徳永，1996）が使用目的に応じて戦力となりつつある。

しかし、心理検査は市販される以前の標準化段階の検証結果が基準となり、個人の状態把握に有効ではあるが、具体的問題解決に利用されれば役割は終わる。理解しやすく簡便な検査は長年月にわたって使用されるものの、そうなれば時代とともに基準のずれる可能性があり、実態と合わなくなる心配（谷嶋，1995）が生じる。ところが基準を変えれば過去との比較が困難となる問題が残り、実用の便を優先させるか、研究上の妥当性を尊重するか、学会レベルでも議論の分かれるところである。

YG法の市販当初は、質問票の中に「UK法との併用が望ましい」と記載された一時期があるくらい、両検査の関係は深い。神ならぬ人間が人間を検査し判定することの是非は、いわゆるテスト批判問題として教育界を揺るがした時代があった。それでもなお、日本で１、２位の利用率を誇る両検査を筆頭に、世は心理テストが氾濫し、使われ方が逸脱する例さえ見られる。YGについて見れば、半年は結果が変わらない前提がある。いわゆる信頼性限界６ヶ月の範囲内で２回の検査を実施し、指導前後の効果を論ずる研究は誤りである。特性説に立脚するにもかかわらず極度に細分化した類型説の立場から結論を導く研究、類型名を誇張して個性を決めつける指導、順位得点の意味を無視した尺度名に依存する解釈なども間違いと考えてよい。

YG法では、誰もが持ち得る心理的特性を因子分析法による12尺度と最終３因子解で構成し、120設問に対する３段階評定の回答に基づいて個人のパーソナリティ傾向を位置づける手法がとられている。その個人が属する母集団の中で、どのくらいの順番に位置するかが分かれば、平均的か極端な存在か尺度毎の個人特徴が明示される。集団の代表値を基準に個性を位置づける考え方は統計的思考の根幹をなし、特性説が成立する基盤ともなっている。したがって個人内変動の法則を究明する臨床的思考と比べると個人間差異の研究に利用しやすい筈であるが、統計処理を施した研究は必ずしも多くない。とくにスポーツに関しては、スポーツマンタイプ（藤善，1968）や運動の好嫌とパーソナリティの関係（松田，1987）をはじめとして、類型別出現率の差異から

見た結果が押しなべて積極－外向的特徴を示す範囲に納まり、発展性が少ない。これは、YGの利用が個人の特徴把握から具体的な問題解決の方向に向かい、教育的指導や臨床的思考に役立てられているからではないだろうか。スポーツに関しても優勝者は少数、勝者と敗者の心理を比較しようとしても、統計処理にのせる例数を集める苦労は並大抵ではない。

それだけではあるまい。平均差の検定に分散分析やt－検定を用いる手法は統計的思考に基づく研究の常道であるが、少数例に適用した場合の危険性を無視したものが目立つ。標本数が少ない場合は分布の正規性が保証されないから、正規性の規定条件をはずしたノンパラメトリック法（丘本，1974）の採用が必須である。検定率の低さが壁となって実検仮説を立証しにくい難点があるので、正規性の束縛を受けないX^2－検定や臨界比による検証例は見られても、間隔尺度の情報量を捨てて順序尺度による中央値検定（岩原，1957）を援用したスポーツ研究は稀にしか見られない。それどころか水戸黄門の印籠で事を納める時代劇のように、「……○％水準で有意差が認められた」と強調しながらパラメトリック法の使用条件を外した研究が多く、学的発展を期するには一考を要する例が頻発している。

一方、統計的検証ベースにのらない少数例報告が意味をもつ研究がある。世界で初めて成功した胃癌の全摘出手術は、その後の研究にどれだけの貢献をなしえたか。臨床報告に基づく事例研究の価値は、たとえ1例であっても価値がある。臨床的思考と統計的思考は個人内変動の法則性定立と集団の代表値を推定するところから始める出発点に差異があるだけで、最終的には臨床例を多数蓄積することによって統計的検証に耐えうるものとなる。スポーツ場面での臨床報告が市民権を得つつある現在、そこで使用される概念の規定と検証仮説を明記した上で、論理的かつ精致な事例記述を積み重ねていく努力が疎にされてはなるまい。同時に少数例の中にある法則性を、統計法の限界を把握して一般化する取り組みが尊重される必要があろう。

本研究では、スポーツマンに関して証明されてきたYG尺度による競技心理の法則性にヒントを得て、国際試合での勝利レベルと性格特性の関連を女子柔道の実践例の中に認めたので、少数例検定を施して追証する。競技における勝敗が選手のパーソナリティに与える影響を特定し、今後のメンタルサポートを進める上で役立てば幸いである。

Ⅱ　方　法

全日本柔道連盟の科学研究部は、四半世紀を越す男子強化選手849名の心理データをもち、女子に関しても10年間の蓄積がある。その中心は作業検査法の一つに位置づけられるUK結果（船越，1992，1997）であり、年1回ペースで定期的に収録されてきた。一方、質問紙法によるデータ収集はコーチの要請に応えて不定期に実施するのが通例である。シドニーオリンピックに向けて強化体制が変わって1年、パリ世界選手権では女子柔道にとって念願の金メダル複数個獲得が実現し、順風満帆の感がある。平成10年度は世界規模の大会がなく、地力向上と国際試合への適応が課題の年と見ている。新春合宿は2月からの欧州遠征へ向けて意気軒昂、精神面の充実に関心の深いコーチングスタッフの要請を受けてYG検査を実施した。個人結果はヘッドコーチ宛にB5版8頁分で報告する一方、希望する選手とは面談を行った。所期の大会で勝ち切れなかった選手の気持ちは真剣、一時間余り話しこんでいく者もおり、期待に応えた選手の自信と余裕のある姿と比べて落差が大きかった。その点に着目して戦績上位群と下位群の比較を試みたのが今回の結果である。処理手続と関連事項は次の通りである。

1）YG検査実施日時：1998年1月6日、朝食終了後の午前8時開始。

2）受検者：全日本女子強化選手21名、他8名。

3）検査場所：兵庫県神崎郡福崎町文殊荘。

4）データ処理手続：①グルーピング：戦績上位群 8 名；1998年10月のパリ世界選手権メダリスト 3 名を含む福岡国際女子選手権のメダリスト。戦績下位群 8 名；福岡国際非メダリスト 7 名および期待されながら不出場者 1 名。残り 5 名は上記 2 大会には関係せず、心理機制が別と考えられるので比較対象から外す。②12尺度別粗点の確認と修正点計算：下位群の中に中学生と高校生が各 1 名該当しており、粗点によって直接データ比較を行うわけにはいかない。したがって粗点のパーセンタイル順位に基づいて成人基準のパーセンタイルから修正粗点を求める処置を行う。③Uテスト値計算（岩原，1957）：16名の粗点に順位づけを行い、12尺度毎に戦績 2 群間のU得点を計算し、有意水準を確認する。④群別中央値の算出：順位の中位数から群別粗点の中央値（Mdn）を求めた後、YG性格検査プロフィールに 2 群の中央値をプロットする。

以上の手続きによって少数例検定の基礎条件を整えた上で、他のスポーツにおけるYG法を用いた競技適応研究の結果と比較して検討を行った。

Ⅲ　結果と考察

YG法を用いた「スポーツマン的性格」の研究（藤善，1968）が世に出て久しい。スポーツマンに対するイメージは、社会性、意志性、活動性、身体性、情緒性の 5 次元で捉えられ、健康で活動的、意志が強く忍耐力があり、礼儀正しく公正であって、あっさりした明朗な姿によって捉えられているのが一般的である。

このイメージは、厳しいトレーニングを重ね、目的をもってスポーツを継続し競技する人ばかりでなく、単にスポーツが好きと思っている人たちの行動特性の中にさえ、部分的には認められるものである（松田，1987）。スポーツの継続によってパーソナリティの表層部が変容する事実は、このような社会的に好ましい性格特性の獲得によって立証され、スポーツ教育論が成立する基盤をなしている。しかし、スポーツは実践すれば好ましい性格形成につながるかと問えば、スポーツ活動中の反則行動や暴力ばかりでなく、反社会的行為が新聞の三面記事を飾る例が跡を絶たず、やみくもにスポーツ教育礼讃論を打つわけにはいかない。勝利至上主義の陰に競争に敗れ、バナウト（土屋，1992）やドロップアウト（筒井，1994）する事例さえあり、競技心理のパーソナリティに及ぼす影響は多角的に検討されてよい主題である。

たとえば競技不適応に関してみれば、YG法による研究の一例として関西学生剣道優勝大会第 1 部上位 4 大学レベルの結果（芦田，1996）がある。それによると正選手に対する非選手の劣等感が大きく、女子については支配性の少ない萎縮した姿が報告され、男子については劣等感と抑鬱性大、活動性と攻撃性小のさらに萎縮した像が浮かび上がった。競技水準の高いゴルファーのアシスタントプロともなれば生活がかかってくる。マンディトーナメントの出場権を賭けた月例会の最高スコア 3 分類別YG尺度（大黒，1989）では、競技成績が低いプレイヤーほど抑鬱性、気分の変化、劣等感、神経質得点が高く、客観性に欠け、支配性の少ない結果が報告されている。この 2 つの研究は50～90人のYG粗点平均と標準偏差を用いたt－検定によって群間差を証明しており、妥当性の高い結果であった。

逆に考えれば正選手や好成績者の情緒が安定しており、社会的向性が外向を示す結果であり、スポーツにおける成功・不成功がパーソナリティに影響を及ぼす証明事例と見なすことができる。勝ちたければ勝ってみよ。思うようにいかなければ、いじけて消極的になる心理が競技種目と競技水準を越えて存在する。トップレベルともなれば、プレッシャーの大きさは想像を絶するものがある。今回の全日本女子強化選手のYGを収集した際には、これらの先行研究の結果から類推す

る目が用意されていた。

1）戦績 2 群別個人プロフィール

表 1 は戦績 2 群毎の個人別YG尺度得点、表 2・3・4 は12尺度別性格特徴とプロフィール 5 型の分類内訳を示したものである。備考欄に記載した通り、戦績上位群は世界選手権出場者 5 名を含んでおり、現在の日本女子柔道を支える中心的選手群と見なしてよい。男子に比べて競技柔道の世界では後発部隊ながら、アトランタオリンピックでは初の金メダル獲得を含む 4 人のメダリストが誕生。パリ世界選手権では金 2 、銀 1 、銅 2 を獲得し、メダル数では両大会とも男子と同数、世界の中での実力がトップレベルに追いついた。パリ大会の 2 ヶ月後、余勢をかった福岡国際でも 8 階級に 3 名が出場権をもつ地の利を得た大会とはいえ、金 4 、銀 5 、銅 2 、5 位 7 、7 位以下 6 名の好成績を残した。世界選手権出場者 5 名中の 4 名が福岡での優勝者であった点も、上位群の力量を示す指標となるであろう。福岡国際から世界に羽ばたいた選手は数多い。

一方、戦績下位群は若手が多く、世界の檜舞台もジュニア大会を除けば初めての選手たちである。しかし11月に行われた全日本女子体重別選手権での優勝者 3 名と 2 位 2 名を含んでおり、国内ではトップレベルに位置している。だからこそ福岡への出場権を得たのだが、敗北の受け止め方は千差万別、以下にYGプロフィールの素描とともに柔道行動の概略を示す。頁数の制約上、個人グラフは省略した。文中の英文字は尺度の略名である。

表 1　戦績 2 群別YG粗点

Table 1　Raw scores of YG scales between high ranking and subordinate players

medalist	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S	note : records of two groups
M1	0	0	0	2	2	8	8	20	8	11	3	14	
M2	10	6	2	4	4	5	11	18	12	10	9	12	Paris world championships, 1997
M3	6	13	11	14	10	6	10	14	16	8	15	20	1st : 2,　2nd : 1,　n.m : 2
M4	13	8	8	0	7	3	4	10	12	14	13	15	
M5	10	6	2	10	8	8	12	15	20	7	18	20	Fukuoka women's Judo, 1997
M6	8	12	7	12	16	6	4	12	12	14	4	13	1st : 4,　2nd : 2,　3rd : 1
M7	2	12	2	4	8	2	18	14	18	12	17	16	5th : 1,　but she was a medalist
M8	8	10	4	0	2	7	9	14	12	18	7	12	in Paris
non-medalist													
N1	20	16	20	16	12	8	0	9	13	6	8	7	
N2	2	6	4	3	6	1	4	9	7	14	10	18	Fukuoka women's Judo, 1997
N3※	9	10	1	17	10	2	16	17	15	5	14	13	5th : 4,　Others : 3
N4	11	6	8	9	7	5	13	16	20	3	17	18	Fukuoka women's Judo, 1995
N5	20	18	17	20	16	16	8	4	14	12	4	6	2nd : 1,　but she was not a
N6	15	17	14	11	14	10	11	6	16	5	11	12	participant after 1995
N7※	20	14	15	12	14	11	5	3	17	7	8	17	※-mark : raw scores corrected at
N8	16	12	14	14	12	15	16	12	14	13	16	16	the level of adults

D < Depression,　C < Cyclic tendency,　I < Inferiority feelings,　N < Nervousness,
O < lack of Objectivity,　Co < lack of Cooperativeness,　Ag < lack of Agreeableness,
G < General activity,　R < Rhathymia,　T < Thinking extroversion,　A < Ascendance,
S < social extroversion

表 2 YG12 尺度別代表的特徴
Table 2 Representative characteristics of 12 scales in YG method

D : Depression	gloomy, pessimistic, character with consciousness of strong guilt
C : Cyclic tendency	change in remarkable feelings, nature being easy of surprise
I : Inferiority feelings	lack of confidence, undervaluation of self, the respondent unsuitable feeling is strong
N : Nervousness	worry, nervous, neurosis feeling
O : lack of Objectivity	fanciful, hypersensitive, subjective
Co: lack of Cooperativeness	a lot of dissatisfaction, disposition not confiding person
Ag: lack of Agreeableness	agressive, vigorous activity, however, when this character is too strong, it is easy to respond unsuitable socially
G : General activity	active character, like to exercise
R : Rhathymia	natural, easygoing, brisk, impulsive
T : Thinking extroversion	non-deliberation, tendency opposite to meditation and introspection
A : Ascendance	a person taking the initiative to social activities, character with leadership
S : Social extroversion	personal outgoing, sociable, tendency liking social intercourse

D : 抑うつ性	陰気，悲観的気分，罪悪感の強い性質
C : 回帰性傾向	著しい気分の変化，驚きやすい性質
I : 劣等感の強いこと	自信の欠乏，自己の過小評価，不適応感が強い
N : 神 経 質	心配性，神経質，ノイローゼ気味
O : 客観的でないこと	空想的，過敏性，主観性
Co: 協調的でないこと	不満が多い，人を信用しない性質
Ag: 愛想の悪いこと	攻撃的，社会的活動性，但しこの性質が強すぎると社会的不適応になりやすい
G : 一般的活動性	活発な性質，身体を動かすことが好き
R : のんきさ	気がるな，のんきな，活発，衝動的な性質
T : 思考的外向	非熟慮的，瞑想的および反省的の反対傾向
A : 支 配 性	社会的指導性，リーダーシップのある性質
S : 社会的外向	対人的に外向的，社交的，社会的接触を好む傾向

表 3 YG プロフィール 5 典型の基本傾向
Table 3 Five types of YG profile

type	common name	modal distinction	factor		
			emotionality D C I N	adaptability O Co Ag	disposition G R T A S
A	Average Type	average	average	average	average
B	Burst Type	right side	unstable	unsuitable	extroversion
C	Calm Type	left side	stable	suitable	introversion
D	Director Type	right diagonal	stable	suitable or ave.	extroversion
E	Escape Type	left diagonal	unstable	unsuitable or ave.	introversion

表４　典型―準型―亜型別分類記号
Table 4　Sorting of modal distinction

distinction / sort	average	right side	left side	right diagonal	left diagonal	indistinct
typical	A	B	C	D	E	F type
similar	A'	B'	C'	D'	E'	
mixed	A"	B"	AC	AD	AE	
common name	A type	B type	C type	D type	E type	

①戦績上位群（Medalist Group）

M_1：D’型、D・C・I・N・O得点の低さが示すように情緒の安定性は抜群、G得点が最高で活動的な点は柔道向き。ただしA得点は低く服従的な行動心理は世界的選手としては考えもの。他をリードする力をつけて欲しい。

M_2：AD型、M_1選手と同傾向ながら平均寄り。長いスランプの後で世界に飛躍する契機をつかんだ。自信の回復が情緒の安定性を高めつつあり、積極性を増すことが課題。

M_3：AB型、R気軽でS社会的外向は地のまま、しかしN取り越し苦労がついて廻り、肝心なときにビビる癖を直す必要あり、世界選手権での失敗を乗り越える姿勢が見られる。

M_4：D’型、N神経質得点は零値、T思考的外向によって敗北を後に引かない強さがある。力あり、Ag攻撃性不足が後手を踏む因となっている点に気づき、以後勝ち始めた。

M_5：AB型、R気軽でS積極外向的、A支配性もあるがTよく考えて行動する。C気分の変化が大きい点は試合結果と並行する。むら気を克服して世界への挑戦権が得られるか。

M_6：A”型、O客観性の欠如とAg攻撃性の不足が同一因子内で併存する矛盾あり。合理的思考をせずに稽古に熱中、負けて途方にくれてコーチの言に従うだけでよいかが問題。

M_7：D型、Tあまり考えこまず、R気軽にA・S人の先頭に立って動いているが、Ag攻撃性を振り廻しながらCo協調しようとするは矛盾。粘り強さを生かす自己理解が大切。

M_8：D’型、Nくよくよせず O客観的に物事を見つめる点はよいが、Tあまり考えこまない生き方が欲のなさにつながってはいないか。情緒の安定性に比べて積極性が不足する。

②戦績下位群（Non Medalist Group）

N_1：E’型、D・C・I・N・O得点高く情緒不安定、Ag攻撃性が零値で戦うは柔道にとってマイナス。好不調の波を自ら作っている。

N_2：D’型、情緒は安定しているが、Co協調的でAg攻撃性を控える心理は良い子になりすぎ。言われて動く段階に止まると頭打ち。

N_3：D’型、I劣等感少なくCo協調的、先輩の猛練習にN多少たじろぎながらも、Ag負けん気にG・R動き廻っている。年少なので可。

N_4：D’型、みかけよりRのんきで大らか。Tよく考えてからA・S行動しており、楽しみあり。体と技の完成に力を入れるべきである。

N_5：E型、極端な情緒の不安定さと消極内向的行動傾向が顕著、自分で自分をダメと思いこんでいる心の持ち方からの脱皮が課題。

N_6：E’型、C気分の変化大とO主観的傾向を中心に情緒が不安定気味。R気軽さを装ってもTつい考えこみ、行動に勢いが欠ける。

N_7：B’型、たいした努力もせずに勝ってしまい、自分は来る処を間違えてると思い悩む。D悲観的に考えこむのも壁の一つ。

N_8：B型、ここ2年、結果が出ずにいらいらが募る。Co非協調的でAg攻撃的。見通しが立たず、がむしゃらにやるだけの不毛さあり。

このように眺めると、競技水準に関係なく心の持ち方には課題が付き物である。しかし、個人名の後に示した戦績2群毎のYG類型に着目すると、上位群は、情緒安定－社会的適応－積極外向を示すD型が準型と亜型を含めて過半数の5名が該当するのに対して下位群は3名である。情緒の不安定さが目立つB型とE型の出現数は、上位群が亜型の2名に対して下位群は典型と準型の5名と逆転している。少数例ながら類型の出現傾向にこの程度の差が認められるならば、データ数が蓄積されれば検定基準に達する予測が成立しよう。けれども16名の数少ないYGデータの範囲では、差は検証されなかった（$X^2=1.000$, $P=0.50$）。単純に推定するならば、同様の出現率差が有意水準5％以下で認められるためには、4倍の64人のデータが必要であり、4年間にわたってデータの集積を待たなければならない。研究ベースにのせるには至難の業である。

幸いにも柔道以外の競技における成功・不成功がパーソナリティに影響を及ぼす研究事例は、先述したとおりに存在する。女子柔道のトップレベルについて類型の出現率にヒントを得たので、尺度別競技水準差を検定する試みは期待を抱かせるものがあった。

2）戦績2群別YG尺度間差異

方法の章で述べた②③④の手続きを経て、表5の尺度別順位値に基づくU－検定結果を得た。それを戦績上－下位群の中央値に基づくYGプロフィールとして示したものが図1である。図の左欄に両群の中央値と群間差の認められた尺度に対する有意水準表示（＊印：5％水準、△印：

表5　尺度別順位値とU－検定結果

Table 5　Ranking of players in YG scales and the results of U-test

											Mdn　raw data
D	M	1	2.5	4	5	6	8	9	11	U1＝8＊8＋8(8＋1)／2－46.5＝53.5＞51	＊5.5：12.5／8：16
	N	2.5	7	10	12	13	14	15	16		
C	M	1	3.5	3.5	6	7.5	10	10	12	U1＝8＊8＋8(8＋1)／2－53.5＝46.5＜51	6.8：11.5／9：13
	N	3.5	3.5	7.5	10	13	14	15	16		
I	M	1	3	4	5	6.5	8	9.5	11	U1＝8＊8＋8(8＋1)／2－48.0＝52.0＞51	＊5.8：12.5／3：14
	N	2	6.5	9.5	12	13	14	15	16		
N	M	1	2	3	5	6	8	10.5	12.5	U1＝8＊8－8(8＋1)／2－48.0＝52.0＞51	＊5.5：11.5／4：13
	N	4	7	9	10.5	12.5	14	15	16		
O	M	1	2	3	5.5	7	8	9.5	15.5	U1＝8＊8＋8(8＋1)／2－51.5＝48.5＜51	6.3：11.5／7：12
	N	4	5.5	9.5	11	12	13	14	15.5		
Co	M	2.5	4	5.5	7	8	9	11	11	U1＝8＊8＋8(8＋1)／2－58.0＝42.0＜51	7.5：12／6：8
	N	1	2.5	5.5	11	13	14	15	16		
Ag	M	3	3	6.5	8	9	10.5	12	16	U1＝8＊8＋8(8＋1)／2－68.0＝32.0＜51	8.5：8.5／10：10
	N	1	3	5	6.5	10.5	13	14	15		
G	M	6	7.5	9	10	11	12	15	16	U1＝8＊8＋8(8＋1)／2－59.5＝50.5＞49	△11：4.5／14：9
	N	1	2	3	4	5	7.5	13	14		
R	M	2	4	4	4	6.5	10.5	13	14.5	U1＝8＊8＋8(8＋1)／2－58.5＝41.5＜51	5.3：8.75／12：14
	N	1	6.5	8.5	8.5	9	10.5	12	14.5		
T	M	5.5	7	8	9	10.5	14	14	16	U1＝8＊8－8(8＋1)／2－52.0＝48.0＞15	9.8：4.75／12：7
	N	1	2	3	4	5.5	10.5	12	14		
A	M	1	2.5	4	7	10	12	14.5	16	U1＝8＊8＋8(8＋1)／2－67.0＝33.0＜51	8.5：8.5／11：11
	N	2.5	5	6	8	9	11	13	14.5		
S	M	4	4	6.5	8	9	10.5	15	16	U1＝8＊8＋8(8＋1)／2－63.0＝37.0＞15	8.5：8.5／15：15
	N	1	2	4	6.5	10.5	12	13	14		

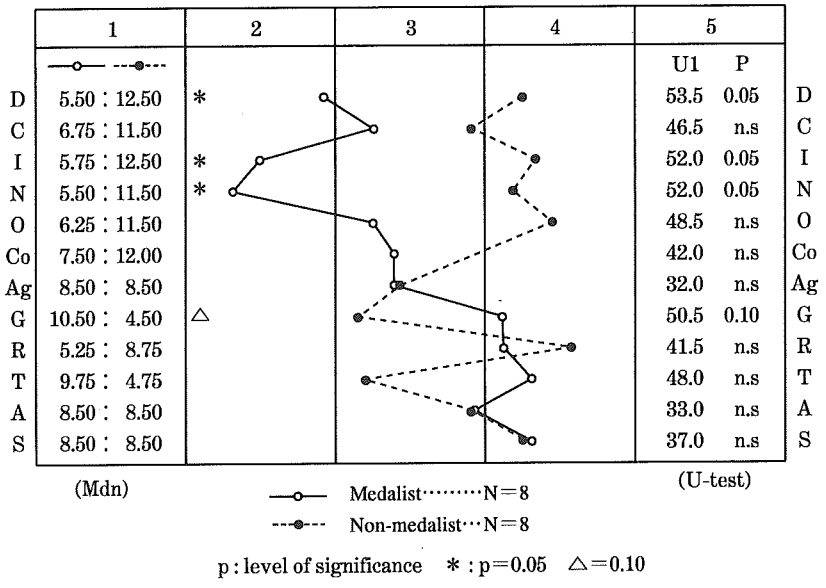

図１　戦績別YGプロフィール：福岡国際女子柔道選手権（1997）

Fig. 1　YG profiles drawn by median and statistical differences based on a nonparametoric method, from records of Fukuoka Women's Judo Championship, 1997

10％水準）を示した。右欄には順位検定の一つ、Uテストの結果と有意水準（U1とP）を記した。僅か８名対８名の少数例検定ながら、群間差が４尺度にわたって確認された。

白丸印で描いたメダリストたちは、C気分の変化こそ普通の水準にあるが、D抑鬱性、I劣等感、N神経質の情緒性３尺度は標準得点２の範疇におさまり、安定した好ましい状態にある。社会的適応状態を表すO、Co、Agの３尺度は平均順位内におさまり、その後に続く活動性と向性はA支配性を除いて標準得点4に位置する。視覚的に捉えると右下がりの経過をとるD'型に入る。戦績上位群は情緒安定－積極外向の自己意識をもち、社会的適応と支配性は人並と自覚する集団であった。

一方、黒丸印で描いた非メダリストたちは、標準得点４と３に各６尺度が該当するB'型であり、メダリストとは対照的に情緒の不安定さが目立つ。とくにD、I、Nには明らかな差が認められ、国際試合の登竜門で勝ちきれなかったジレンマが顔を出す。プレッシャーに拉がれてチャンスを逃した責任を背負いこめば、悲観的に神経質になり、劣等感を増幅させることがあっても不思議はない。

類型別出現率では差の認められなかった少数例の中で、明確に尺度間差異を特定できた意義は大きい。剣道もゴルフも共に劣等感が認められたので、I尺度は挫折を最も敏感に捉える指標と考えられる。データ数や競技種目別影響、性差、競技水準差などの関連要因の検討が必要であるが、次いでDとN尺度、すなわち抑鬱性と神経質傾向が弁別力をもつ。ゴルフに比べて柔・剣道は活発な身体活動を伴う種目であるから、G尺度で示される一般的活動性に差が認められた点も了解できる。

YG検査は、競技心理の研究のために開発された質問票ではない。一般生活の中で客観的に個性を捉える手法として特性説の立場から標準化されており、12尺度は誰もが持ち得る性格特性を示し、平均からの隔たりが個人の特徴を表す形式をとっている。基本的には個人の比較的安定し

た性格特徴を捉えているが、普段の自分を振り返って回答しており、半年は結果が変わらない前提がある。しかし経年的に同一人に検査を繰り返すと変化の生じる例が出てくる。人生の危機や生活上の転機に情緒が不安定になり、消極内向的に逼塞すれば、普段D型の人がA型に転じる変化が生じても不思議はない。一朝一夕に変わる側面を捉えるほど敏感ではないが、心の中にためこんで自分では何ともしようのない心理側面は、以前とは異なる粗点水準として検査結果に投影されることとなる。特異な体験は心理尺度上の平均から離れたところで自覚されるから、勝てば安定、負ければ不安定の情緒性変動は必然である。YG法が粗点分布の正規性に基づいて極端な反応を位置づけているだけに、競技心理の特異性が客観的に捉えられる結果を生じるのであろう。

勝ち切れなかった選手の心の動揺は、むしろYG尺度上の得点変動よりも劇的な姿をとることがある。敗北直後の放心状態、柔道でありながら礼さえ忘れ、コーチの声がかかる前に絶叫して逃げ出す。その日だけではない。一日たっても仲間と口をきかず、掛からぬ技に業を煮やし癇癪をおこす。かと思えばニコニコと機嫌よく、傷心のかけらも見せぬ愛嬌を振りまく。常と変わらぬ様でありながら溜息がもれ、やることに勢いがなくなる。昂じれば胃を病み減量を忘れた過食に走り、人違いをするような肥り方をする選手が現れる。

世界選手権初デビュー以来、意に反して体重が激減した選手がいた。階級を下げて復活するのに4年の歳月を要し、その間の葛藤は家族を含めて量り知れないものがあった。自分にとっての壁を乗り越え、人間として成長することがない限り、勝負の先は見えてこない。彼女は敗北と挫折に学んだ。負けて罪悪感にさいなまれ、劣等感を囲うことがあっても一向に構わない。苦しいときは苦しみ、悩むときは悩み抜いて、そこを自力で脱した人間のみが知る強さを学ぶときだった。勝ちたければ勝つための工夫と努力を惜しまず、勝ちきるまでのエネルギーを燃やし続ければよい。立ち直りのきっかけを掴んだのも心理検査の結果を前にした面談からであった。

うまくしたもので、勝ち切れなかった戦績下位群は、情緒不安を増幅しながら安全弁を用意していた。G、R、T、3尺度の関係が、その点を証明する。G活動性が低下して情緒不安が拡大する中で、T熟考を重ねているのが彼女らである。一流のスポーツ選手の中には、情緒不安定－社会的不適応－積極外向のB型がいる。確かにB型だが、共通してT尺度が思考的内向を示す点が救いとなって、際どいところで爆発をまぬがれている（長田，1971）。改めて黒丸印のプロフィールをたどると、12尺度の中で最も低いパーセンタイル順位が示されていた。

加えて、ともすれば滅入りがちな心情を自ら奮い立たせて、バランスをとる姿がR尺度の突出に表れている。ちなみにパーセンタイル順位を基にUテストを行うと3尺度間に差が認められた（G－R：$U_1=53>51$，$P=0.05$，R－T：$U_1=49\geqq49$，$P=0.10$）。負ける理由があって負けて、さばさばしているのとは違う。勝ちたくて負けたときの心の揺らぎを笑いとばし、はしゃぎ、気楽に動き回る中でバランスをとっていく。顔で笑って心で泣く、反動形成と同じ防衛機制（依田，1952）に相当する心理であろう。

ここに示したYGデータは、国際大会とはいえ国内で行われた日本にとって有利な試合条件での少数例検定結果である。1階級1人しか代表権のない世界選手権やオリンピックともなれば、プレッシャーの比は想像を絶するに違いないが、マイナーとか後発部隊といわれているうちはメダルに達すると一安心、本人も周囲もホッとするようなところがある。女子柔道が男子に追いついたと自負するならば、金メダル以外は相手にされない厳しさを男子と同様に覚悟しなければならない。

しかし今回の結果を先行研究と合わせて位置づけるならば、勝負には競い合うレベルに応じて壁があり、壁に打ち当たった人間の心理は同一の法則で貫かれているということではなかろうか。

打ちのめされた人間は劣等感の増幅を筆頭に、神経質に悲観的気分に陥り、活動性が低下する。曲がりなりにもトップレベルにある選手は、めげずに積極外向的に振る舞い気楽にさえ見えるが、考えるべきことは考えた上での行動である。心の動揺とエネルギー水準の低下を見据えた上で笑いとばしてバランスをとる。このような共通する競技心理を体験した勝者が自信をもち、必然的に情緒が安定し、人を支配する傲りとは無縁の活力と行動力を示すようになる。女子柔道の戦績上位群と下位群の結果は、競争の世界に生きる人間のダイナミクスを明示しているといえよう。願わくば目的意識を明確にもち、自力で困難に立ち向かい、創意工夫と努力を惜しまぬ選手が育って欲しい。YGを始めとして、選手の自立と課題解決に役立つ心理テストの利用が望まれる。

Ⅳ　要　約

第15回福岡国際女子柔道選手権大会の約1ヶ月後にYG検査を実施した。ノンパラメトリック法を用いた分析から、先行研究の結果と比較した戦績上位8名と下位8名の心理特徴は次のように位置づけられた。

1）戦績上位群は情緒が安定し、積極外向的行動傾向が明らかであった。

2）戦績下位群は抑鬱性が低く、神経質に劣等感を増幅し、活動性が低下した。しかし沈みがちな情緒を、熟考と気楽に振る舞う行動心理によって補っていた。

これらの特徴は、性差、競技種目差、競技水準差を越えて存在する可能性が示された。

参考文献

1）芦田圭子他：精神的側面からみたスポーツ適性研究――関西男女学生剣道優勝大会上位大学について，大阪武道学研究，7－1，9－15，1996.

2）大黒敏春他：アシスタントプロの心理－2、運動適応論の視点から，日本ゴルフ学会　第2回大会発表，1989.

3）藤善尚憲他：スポーツマン的性格，不昧堂，1968.

4）船越正康他：No.Ⅱ競技種目別競技力向上に関する研究16－Ⅲ、柔道選手の競技適応――国際試合を中心に，No.Ⅱ－16－4－Ⅲ，62－69，JOCスポーツ・医科学研究報告，1992.

5）船越正康：競技柔道における臨床的思考の適応，柔道競技力向上研究1，9－14，関西柔道競技力向上研究会，1993.

6）船越正康：No.Ⅱ競技種目別競技向上に関する研究10－Ⅰ、柔道選手の競技適応―「ハミルトン世界選手権を中心にして」，114－122，日本体育協会スポーツ・医科学報告，1993.

7）船越正康：国際試合に臨む柔道選手のメンタルサポート，大阪の柔道20，7－11，大阪柔道連盟，1997.

8）岩原信九郎：教育と心理のための推計学，174－177，日本文化科学社，1957.

9）古賀浩二郎：運動能力とパーソナリティとの関係についての研究，体育学研究，12－5、41，1968.

10）小林晃夫：内田クレペリン精神検査法による人間の理解、3－1運動適性と曲線型，188－206，東京心理技術研究会，1970.

11）小林晃夫：曲線型の話――人間形成の道しるべ、6－5スポーツ選手と曲線型，168－181，東京心理技術研究会，1974.

12）小林晃夫：スポーツマンの性格――性格からみた運動技能上達への道，杏林書院，1986.

13）松田岩男他編：新版運動心理学入門、8運動とパーソナリティ，203－228，大修館書店，1987.

14）文部省：昭和59年度体力・運動能力調査報告，372－382，1986.
15）丘本正他訳：Ha'jek. J著，ノンパラメトリック統計学，日本技連出版社，1974.
16）長田一臣：競技の心理，176－183，道和書院，1971.
17）斎　実：運動選手と非運動選手のMMPIについて，体育学研究，11－5，56，1967.
18）高橋邦郎：No.Ⅱ競技力向上に関する研究12－9、柔道Ⅰ，適性論からみた柔道選手の特徴とオリンピック適応――特に精神的側面から，155－159，日本体育協会スポーツ科学委員会，1988.
19）戸川行男監：精神作業検査要覧――クレペリン式連続加算法の研究，実務教育出版，1973.
20）徳永幹雄：ベストプレイへのメンタルトレーニング，大修館書店，1996.
21）土屋裕睦：日中大学運動選手におけるバナウトの因子構造の比較研究，日本体育学会第43回大会号A，236，1992.
22）辻岡美延：新性格検査法――YG性格検査実施・応用研究手引，日本・心理テスト研究所，1976.
23）筒井清次郎：ドロップアウト時期を規定する心理的要因，日本体育学会第45回大会号，242，1994.
24）続有恒他編：心理学研究法9、質問紙調査，東京大学出版会，1975.
25）内田勇三郎：新適性検査法――内田クレペリン精神検査，日刊工業新聞社，1957.
26）谷嶋喜代志他：YG性格検査の信頼性に関する研究――プロフィールの判定基準について，日本体育学会第46回大会号，239，1995.
27）横山和仁：日本版POMS，金子書房，1994.
28）依田新編：教育心理学講座1、適応の心理，41－82，金子書房，1952.